



© 篠山紀信

前橋汀子

スペシャルインタビュー

2015年で演奏活動53年目を迎えられる前橋汀子さん。

日本人として初めて旧ソ連に留学されて日本を代表する国際的ヴァイオリニストとして活動を続けています。

ザ・シンフォニーホールでも1982年の開館以降、数多くの名演が聴衆の心に焼き付いています。

今年もリサイタル公演にご出演頂く前橋さんに色々なお話をお伺いしました。

—— 幼年期にヴァイオリンを始めて、小野アンナ先生に出会われてからソ連への憧れがもの凄く強くなり、中学生になってソ連に行くんだという強い決心を持たれたとお聞きしていますが、そのきっかけとは？

小学校3、4年の時に日ソ国交回復後の文化使節として来日したヴァイオリンの巨匠オISTRAフのコンサートを聴いてからです。母には色々な演奏会に連れて行ってもらいましたが、日比谷公会堂で行われた彼の演奏会で、ヴァイオリンの音が本当にふくよかで、まるで体の一部となつて自由自在に動いていると感じ、子供心に非常に感銘を受けました。私はまだ小さく、小さな楽器しか弾けなかったので、ヴァイオリンの本質が聞こえたような気がしました。それで単純にソ連に行けばああいふ風に弾けるんだと思ってしまったんでしょね。それで私はソ連に行つて勉強するんだと決めたんです。その時は子供の夢だったんですよね。そこへ行った人もいないし、どうやって行けるのかも分かりませんでした。

—— 5才からヴァイオリンを手に触れられて、どのようなコンサートを開きに行かれたんですか？

母が貴重で高価なチケットを一枚だけ手に入れて、私だけ会場に入るんですよ。そして母は終演まで会場の外で待っている。とにかく一流の演奏家の演奏を私に聴かせたい一心で連れて行ってくれたんですね。そして53年のシゲティ先生の演奏会では、たまたま通路にいた私の頭を彼が通りがかりに撫でてくれた事が記憶に残っています。またその時プロコフィエフ

の逝去の報に接し、アンコールに1番のコンチェルトの第2楽章のスケルツォを弾かれたんです。話は飛びますが、その10年後にレニングラード(現サンクトペテルブルグ)でプロコフィエフの没後10年のガラ・コンサートがあり、それに出演させて頂いてソナタの2番の第3、4楽章を弾きました。何か縁があるんでしょね。

—— 17才で単身ソ連に行かれて、言葉にできないような苦楽を体験されたと思いますが？

今振り返ってみるとソ連も特別な時代でしたよね。面白いと言ったら語弊があるかもしれませんが、冷戦時代で食糧難でもあり、寮に住んでいましたが練習したくても場所が無かったり、お湯が出ないのでお風呂にも苦労しました。日常生活は大変ではありましたが、勉強する環境は最高でした。当時は演奏家の最盛期で、キラ星のごとく才能あふれる音楽家がいる、そこに立ち会えた訳ですから。

—— 一時帰国されてから、アメリカのジュリアード音楽院という全く違う環境に行かれる訳ですが、いかがでしたか？

これは全くの偶然的産物です。レニングラードに3年居て、無理をしたため少身体を壊したので、一時帰国したんです。その時はもう一度ソ連に戻ろうと思っていました。たまたま帰国した年にジュリアード・カルテットが日光でワークショップを開いていました。そこで即席に弦楽トリオを組んでシェーンベルクの三重奏をレッスンしてもらいました。それがきっかけでロバート・マンさんからジュリアード音楽院への奨学金を用意してあげるという話が出ました。すごく魅力的なお話

でしたが、当時ソ連に行っていたのでアメリカへのビザや航空券代の問題が大きかったです。それもマンさんや廻りの方々の援助でクリアになり、ジュリアードに行ける事になりました。ジュリアードには学生として1年間滞在し、その後ニューヨークにそのまま住んでいましたが、ソ連で抑制されていたものがはじめて、羽目を外してしまいました。(笑)

その当時何も無かったソ連から、使い捨ての文化のアメリカ、特にニューヨークという別世界との変化に戸惑ったのかもかもしれませんね。

—— 高校の時から海外で学びながら、究極の東西をご覧になられた前橋さん。80年代に日本に戻って来られて、その演奏活動の途中、1982年にザ・シンフォニーホールが開館しました。そこでお客様を迎えて最初のオープニング・コンサートのソリストとして初めて登場したのが前橋さんでした。

あの時は朝比奈隆先生の指揮で大フィルハーモニー交響楽団とベートーヴェンの三重協奏曲を演奏しました。あの曲はチェロに比べてヴァイオリンが難しい割に余り目立たない曲なんです。朝比奈先生はヴァイオリンを弾かれるし、ベートーヴェンの一音一音にイメージがおりたので、細かい指示が出て叱られました。本当に厳しかったことを覚えています。

—— 2002年に東京のサントリーホールと大阪のザ・シンフォニーホールでヴァイオリン名曲選を始められ、2005年からはほぼ毎年続けて開催されています。お客様も年1回のこのコンサートをとて

も待ち望んでいます。今年のコンサートの全体的な流れや曲目はどんな風に決められたのですか？

曲目に関してはスプリング・ソナタとツィゴイネルワイゼンを軸に考えました。そこにフランクのヴァイオリン・ソナタを前半に加えました。後半は私の好きな小品で構成してみました。さらに今年はちょっと趣向を変えて懐かしの名曲集を組み込んでみました。この中の「枯葉」とか「ウエスト・サイド・ストーリー」、グイエスタデイなどの曲は多分、私のコンサートに来てくださる年代の方々の青春時代に流行った曲じゃないですか。そんなメロディを聞くことによって、青春時代を懐かしんでいただけたら…という発想なんです。

—— この「懐かしの名曲集」はご自身で選ばれたのですか？

もちろん、自分で。という選曲にしようとか、どういつなぎで行こうかって全部自分で考えるの。結構頭を悩ますとこなんです。今回の曲は編曲もいいし、演奏部分もいいし、聴いて頂くとすごく楽しいと思います。それからピアノの松本さんはこういった曲も得意。音を実際に出してみて、『あ、ちよつとこのとこ、こういう風に』とかアドバイスをくれたりして一緒に随分協力してくれました。

—— 前橋さんの目から見たザ・シンフォニーホールの印象はどんなものですか？

ザ・シンフォニーホールは開館からもう30年以上が経っています。世界中のクラシック音楽家の中で、大阪のザ・シンフォニーホールという名前、そして存在感は十分に確立したと思います。世界中の



音楽家がホールの素晴らしさを賞賛していて、皆がそこで演奏することを楽しみにしています。大阪のザ・シンフォニーホールで演奏できるという事自体が、彼らにとつて大きなステータスなんです。このことを私はハッキリと申し上げたいです。開館から30年以上経ったという事ですが、本当に感慨深いです。私はヴァイオリンです。弦楽器というのはホールの響きに大きく影響されるので、とても弾きやすくステージとお客様とのこの微妙な距離感がとても心地良いです。

—— ステージとお客様との距離が近いですよ。

私も最初の頃はちよつとそう感じていました。今はそれが「ザ・シンフォニーホールはこうだ！」という特徴になつていて、非常に心地よいというか、雰囲気を含めて演奏しやすいです。

世界中には伝統的なクラシックの良いホールが沢山あります。そこにはアーティストにとって必要な楽屋とか設備とかそして何よりスタッフの方々の心遣いが行き届いていて非常に良く整っていると思います。それは演奏するアーティストにとって理想的な環境です。

—— ザ・シンフォニーホールもそれに負けないレベルでしょうか？

もちろん、もちろん！そういうことも含めて、世界中のクラシックの音楽家が競って演奏したがるホールであるじゃないですか。例えばニューヨークのカーネギーホール、ベルリンのベルリン・フィルハーモニーホール、ウィーンの楽友協会とか…大阪ではもう「ザ・シンフォニーホール」なんです。このホールの独特の雰囲気も含めて長年育てていくものだと思いますし、これからもずっといつまでも「ザ・シンフォニーホール」で在り続けて頂きたいです。私もこの素晴らしいホールで1回でも多く弾き続ける事ができればと願っています。

—— 最後に前橋さんの現況を教えてくださいませんか？

最近、弦楽カルテットに夢中で取り組んでいます。私はずっとソロで活動して

前橋汀子 ヴァイオリン名曲選

【ヴァイオリン】前橋汀子
【ピアノ】松本和将

ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第5番
へ長調「春」 op.24

フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調

ヴィエニャフスキー：モスクワの思い出
ドヴォルザーク：わが母の教え給いし歌
ドヴォルザーク：スラヴ舞曲 op.72-2
クライスラー：中国の太鼓 op.3
シューベルト：アヴェ・マリア D.839

〈懐かしの名曲集〉(丸山貴幸編)

枯葉
“ウエストサイドストーリー”より「マリア」
イエスタデイ
“オペラ座の怪人”より「オーバーチュア」
愛の賛歌

サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン

発売中

2015. 6/27(土) 2:00PM 3,500円(税込)

【ご予約】ザ・シンフォニー チケッセンター 06-6453-2333
【お問い合わせ】ABCチケットインフォメーション 06-6453-6000
【主催】朝日友の会、朝日放送